慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	英国の食物供給問題
Sub Title	
Author	堀江, 帰一
Publisher	三田学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.1 (1914. 1) ,p.49- 53
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140100-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

變更せしむるの原因ともなるものなり、同時に斯の如き努力の用意ある人口の、增加こそ初めて一國の經濟を發達せしむるにも至るものとす。

個人たると國家たるとを問たず此努力を伴はずして如何なる方面に於ても大なる發展は庶幾し得可きに非らざるなり、然るに自由派に屬する人々は動もすれば政府の干渉を排斥するを以て能事了れりとなし、但しは個人の自由行動をのみ唱導して國家的團體的の計畫、活動を非難し、甚しきは無爲安逸退嬰孤獨の弊に陷りて自ら怪まざるものなきに非ず、政府の干渉は時として大に排斥す可きものあるは勿論なりと雖も、然も賢明なる思慮計畫に元く政府の活動は常に國家の爲めに必要なり、同時に自由思想に原く個人の行動にも常に賢明なる思慮と熱心なる努力となかる可らず、要するに吾人は經濟思想の如何を問はず、學派の如何に論なく、國の東西古今に關係なく各々自家の範圍に於て努力の必要を認むるものなり、殊に我國の經濟財政の現狀に鑑みて其必要を感ぜざるを得ず、無爲の放任主義に依り、但しは鎖々たる政府財政策の變更に依りて大なる國民經濟の發展を導かんとするが如きは到底不可能事なりと知る可きなり。

雜錄

英國の食物供給問題

エコノミスト

本篇は一九一三年十一月一日の「エコノミスト」社說を譯出せるものなり。

合衆國に於ける關稅輕減の爲めに生ずる大なる結果の一は從來世界に於ける重要なる公開市場として英國に輸送せられたる濠洲並にアルゼンチーンの食料品供給の割合に異動を惹起さんとするの事實にして、思ふに此事は先づ濠洲、ニユージーランド並にアルゼンチーンより英國に來る肉の輸入に現はれ、次いで穀物の供給に及ぶ可し。近年英國は肉類の輸入に關して、前後二回の恐慌に襲はれたれども、小麥供給の安否は更に國民全體に大なる利害關係を有し、市場に於ける少許の恐慌を以てして、尙ほ其代價を暴騰せしめ、代價の騰貴は貧困なる消費者を窘迫せざれば已まず。バークの云へる如く饑饑の恐怖を以て人民に迫るは政治の平安を維持するに最も危險なるものなり。平靜なる供給を受け、殊に世界豐作の惠に浴しつゝある今日、將來に於て英國は如何なる方面より穀物の供給を得るや將た又一年中の各時期に生ずる供給の變動は何等の危險を及ぼさゞるやの問題を研究するの必要あるは論を俟たず。

千八百七十一年より千八百八十五年に至る間英國が合衆國より輸入したる小麥の平均額は穀類、穀粉を合せて、全體の輸入額の五割を超過し、千八百八十六年より千九百六年に至る間は平均四割八分四厘に下降したり。更に之を數量より云へば千八百九十九年より千九百九十九年に至る四年間の平均は六千二百五十萬cwtsなりしが、千九百六年に至る四年間に於ては、二千九百萬cwtsに下り、千九百七年より千九百十年に至る四年間に於ては二千九百五十萬cwtsに上

り、最近二年間の平均は二千三百萬cwtsに過ぎず。此事實は從來專ら英國に小麥を供給したる米國の地位に變動を惹起したる證據として、特に注意を要するものなり。

最近六年間英國に小麥を供給したる國は六箇國にして、其割合を見るに、合衆國の供給高は全體の二割三分五厘にして、千九百八年には百九十八萬六千噸、千九百十一年には九十萬六千噸を數へアルゼンチーンの供給高は全體の一割八にして百五十九萬二千噸乃至七十四萬四千噸を上下し、加奈陀の供給高は全體の一割七分にして、百三十五萬八千噸乃至七十六萬一千噸を上下し、印度の供給高は一割四分一厘にして百二十六萬九千噸乃至十四萬七千噸を上下し、露西亞の供給高は一割三分にして、百四十四萬七千噸乃至二十五萬七千噸を上下し、濠洲並にニユージーランドの供給高は九分六厘にして、七十六萬三千噸乃至二十九萬二千噸を上下し、其以外の供給は全體の五分以內に過ぎず。

英國の輸入する穀粉の多くは合衆國並に加奈陀の供給に止まるが故に、以下穀類の輸入に就て研究する所ある可し。

一九〇七年より一九一三年に至る輸入小麥(穀類)月別表(單位は百萬cwts)

月	一九〇七年	一九〇八年	一九〇九年	一九一〇年	一九一一年	一九一二年	平均
一	六、六	七、〇	六、二	八、一	六、〇	六、五	六、七
二	四、四	六、七	四、八	六、二	五、〇	五、七	五、五
三	七、九	一〇、五	九、七	七、八	七、六	六、〇	八、二
四	九、一	九、七	九、三	九、五	八、八	一〇、四	九、五
五	八、七	六、五	五、九	九、六	八、三	一〇、〇	八、一
六	一一、四	八、二	九、〇	一〇、二	九、〇	九、六	九、六
七	九、七	六、五	八、三	八、三	一〇、二	九、六	八、七
八	八、八	六、〇	一〇、八	九、六	九、三	一一、五	九、三
九	八、七	八、二	一一、二	九、一	九、一	一〇、一	九、四
一〇	九、〇	七、二	七、四	八、三	七、二	一一、六	八、四
一一	六、九	六、八	七、五	九、九	九、〇	八、八	八、一
一二	五、八	七、七	八、六	九、三	八、七	九、八	八、三

前表に據るに、一箇月間に於ける穀類輸入高が九百五十萬cwtsを超過するは、數年間を平均して、六月あるのみ。四月九月並に八月は之の次いで、九百三四十萬cwtsの輸入あり。是等に四箇月を以て輸入高の九百萬cwtsに上る時とし一、二兩月を以て、輸入高の寡少なる時とし七、十、十二、三、五、十一の諸月は何れも是等の中間に位するを見る可し。而して以上諸年間の各月に於ける供給高の最も多額に上れる時と少額に下れる時とを比較するに、大略左の如し。

月	最高	最低	差額
八	一一、五	六、〇	五、五
三	一〇、五	六、〇	四、五
一〇	一一、六	七、二	四、四
五	一〇、〇	五、九	四、一
一二	九、八	五、八	四、〇
七	一〇、二	六、五	三、七
六	一一、四	八、二	三、二
一一	九、九	六、八	三、一
九	一一、二	八、二	三、〇
二	六、七	四、四	二、三
一	八、一	六、〇	二、一
四	一〇、四	八、八	一、六

一年中の時期に依て、斯く輸入高に劇變を生ずるは主として穀類を供給する場所の關係に基くものにして、各月に於て主として英國に穀類を供給する國を擧ぐれば、左表の如し。

月	一九〇七年	一九〇八年	一九〇九年	一九一〇年	一九一一年	一九一二年	一九一三年
一	米	米	米	露	露	露	加
二	米	米	米	米	印	印	印
三	亞	亞	亞	亞	露	亞	米
四	亞	亞	亞	亞	亞	亞	亞
五	亞	亞	亞	亞	露	亞	亞
六	亞	亞	亞	加	加	露	加
七	亞	亞	印	印	印	印	亞
八	印	印	印	印	印	印	印
九	印	米	印	露	露	濠	印
一〇	印	加	露	露	露	濠	印
一一	印	米	露	露	露	露	米
一二	米	米	露	露	露	加	米

前表に據るに、六年間を通じて、三月より五月に至る三箇月間最も多額の穀類を英國に供給するは、アルゼンチーンにして、此期間に於ては、アルゼンチーンの穀類は全く市場を左右するものと云ふ可し。又七月より九月に至る三箇月間は印度の供給高最も多く、十二月より二月

に至る三箇月間は合衆國主として供給に當り、十、十一の兩月は露西亞の供給群を拔き、六月に於ては加奈陀の供給に依賴すること多きの事實明瞭なりとす。

之を要するに、英國に於ける穀物の供給は合衆國の穀物が三箇月間市場の需要に應じたる後には、アルゼンチーンの供給之に代り、其消耗する以前に於て印度の穀物到著し、十、十一の兩月に至れば、更に露西亞の供給を仰ぐを得るものと云ふ可し。

附言。余は從來我國が食料品自由輸入の主義を實行するの必要を唱道し、之に反する政策を攻擊して今日に至れり。卽ち外國米に對する輸入稅撤廢の必要の如き、常に余の論述する所なれども、今日に於ては課稅の撤廢のみを以て足れりとせず、其撤廢と共に、我國が國策の一として、永く食料品自由輸入の主義を遵守することを中外に宣明するの必要を認めて已まず。蓋し斯の如くにして始めて米の

產出に適する外國の諸地方は我國に於ける米の需要の程度を測量して、適宜產出の範圍を擴張するに至る可ければなり。我國が外國に產出せられたる米の偶々供給過剩と爲れる部分の輸送を受くるの狀態を以てしては、供給の豐富安全共に之を期す可からず。前記「エコノミスト」の論說に據れば、英國は世界到る所の穀物產出地を自國の穀倉とし、交互的に外國竝に殖民地をして、自國の穀物を供給せしむるの狀況頗る明白なりとす。而して此事たる、英國が數十年を通じて、食料品自由輸入の主義を實行せるの結果にして、若しも英國の政策半途に變改するが如きことありたらんには、今日英國の爲めに穀物供給の任に當りつゝある地方は決して今日の程度まで穀物收獲の範圍を擴張せざりしや必せり。日本にして外國より食料品の供給を仰ぎ、而して其代價の低廉を期する以上は、米の產出に適する地方をして總て日本の爲めに、之を產出

する地方たらしめ、東洋に大なる米の集散市場の現出するを期せざる可からず。前記の論文は固より不充分の點ありと雖も、英國が海外より穀物の供給を受くるの狀況の殆ど理想的境界に達したるを示すに足るものあり。卽ち譯載して、讀者の注意を求めんとする所以なり。（堀江歸一）

ボエーム・バヴエルク氏利子論の基礎としての主觀的價値

增井幸雄

維也納商工業會議所顧問「ドクトル」オツトー・コンラード氏は頃日 Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. Folge. III., Bd. 46., Heft 3. September 1913. に於て代價決定の基礎となるべき價値と代價よりして定まる價値との區別を論じ、之を基礎としてボエーム・バヴエルク氏の價値算當の理論の支持すべからざること及び此の支持すべからざる算當の理論の上に築かれたる利子論の採るべからざる所以を論じたり。左に主なる部分を抄譯せん。

一　價値論及代價論の組立に於ける利子問題の地位

批評に入るに先ちて利子問題と價値論及び代價論との關係に就ての私見の一端を述べむ。

價値及代價の成立は既成生產物に對する消費者の主觀的評價に其の源を發するものにして、一方に於て此の主觀的評價は是等の財に對する